

「超一流」経営人の特長

企業経営漫談士 岡野実空

「一流」の企業や経営人については、これまでさまざまな切り口から考えてきました。また逆の「ダメ」事例からも、多くの教訓を得ることができました。さて昨年末、これまでのコラムを再編集した書籍『三々な経営』を刊行しましたが、そこに一番ご登場いただいた菱食(現・三菱食品)の元トップ・廣田正氏に、その本をお届けした際の対話は、「一流」からさらに頭一つ抜け出た経営人の特長を考える絶好の機会となりました。不祥事ばかりが目立ち、尊敬すべき経営人が見当たらない昨今、今回のコラムは、氏をモデルに、「超一流」経営人の特長を「心技体」の切り口から考えます。

心：真摯さ

ドラッカーがマネジメントで最も重視した「真摯さ」は、心の問題で外から見えないため、本人の日頃の「発言」や「態度」から他人に判断されます。その究めつけの解説は、『幸福論』で知られるスイスの政治家で、哲学者でもあったカール・ヒルティによるもの。「人間の真実の正しさは、礼節と同様、小事における行いに表れる。小事における正しさは道徳の根底から生ずるのである」。逆に、「大げさな正義は、単に習慣的であるか、あるいは巧みにすぎぬことがある」。

以上の内容は、このコラム「人間の本性が見える場面」ですでに取り上げましたが、裏表だけでなく、上下の分け隔てもない廣田氏の発言や立ち居振る舞いが、すでに定評があった現役時代と全く変わっていないことに感銘すら覚えました。

技：如才なさ

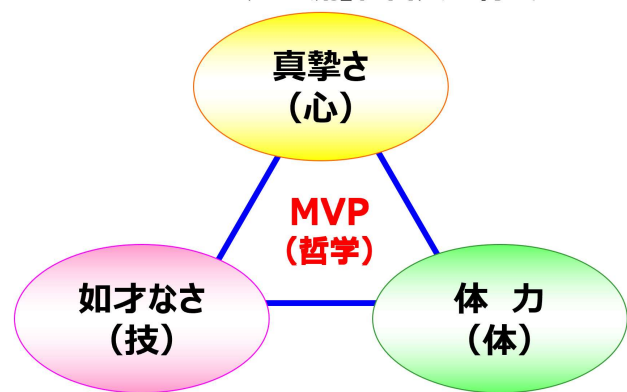
「如才ない」とは、相手の気持ち・立場などを敏感に察し、相手に好感を抱かせる対応ができる様子。(新明解国語事典) 私が氏をその頭抜けた存在として認識したのは、ゴルフに関するいくつかのことから。パートナーを気遣い、突然の雨に備え、雨合羽を4組ゴルフバッグに用意する真似はできませんでしたが、スコアカードに記入する他者の名前に「様」をつける習慣は、それを覗き見したと同時に私も実行に移しました。

ビジネスに絡む「抜け目なさ」で、ときには軽い侮蔑や皮肉を含むこの言葉を浄化するのは、氏のもつ「品格」。一切手を抜かず、しかも相手を常に勝たせる氏の理想的な技量？に対し、「僕はゴルフの才能あるよね？」と見事なユーモアで同意を求められたとき、当時50代半ばの私は、まだ返す答えを全く持ち合わせていませんでした。

体：並外れた体力

同じ頃、自分が遠近両用の眼鏡をかけ始めたこともあり、裸眼で細かい書類を見ている70歳の廣田氏に「コンタクトレンズですか？」という質問を発したことがあります。

KM0-26 「超一流」経営人の特長



その答えは、「鍛えているので老眼鏡など不要」。それから15年を経た先日、鎌倉にある氏の事務所で、「まだ裸眼ですか？」との愚問を繰り返し、その並外れた体力、およびその維持への努力に対し、畏敬の念を新たにしました。

しかしいまから40年前、三菱商事傘下の食品卸4社の合併に奔走し、そのストレスで胃と十二指腸の7割を切除した氏の経歴を考えると、その支えになったのは、「消費と生産を結ぶ価値ある架け橋」を実現するという信念に間違いありません。

廣田氏だけでなく、「超一流」経営人の背骨になっているものは、その「信念」や「哲学」。故・平尾誠二氏の言う、MVP(ミッション、ビジョン、パッション)です。そしてそれが本物である証拠は、肩の力が抜け、「自然体」であること。

今回は、締めもコラムの冒頭に登場したヒルティによる「超一流」の解説です。「教養のある人の最も確かな外的特徴は、衣食住にわたって、全体の外見や生活態度に一種の気品のある、くつろいだ簡素さがうかがわれることである」。

2019年1月14日 実空